

[ブーケ]

bouquet



教育芸術社

No. 07

教育百景

おしえ・おだての日々

学校とは異なる環境で、教育活動を行っている先生をご紹介します本連載の第2回は、福岡県柳川市で、北原白秋記念館館長を務める大橋鉄雄先生にお話を伺いました。

第2回

おおはしてつお
大橋鉄雄先生



大橋鉄雄
北原白秋記念館 館長

白秋の育った町で

——大橋先生が、北原白秋に興味をもったのは、どのようなきっかけでしたか？

私の名前は「鉄雄」ですが、白秋の弟の名前も「鉄雄」です。白秋の弟・鉄雄は、白秋の著作物の出版にも大きく貢献した人でした。その功績の影にはいつも鉄雄がいたわけです。私には「白秋の弟のような、人を助け、支える人間になるように」と、同じ名前が付けられたのです。ですから幼い頃から、白秋の存在を意識していましたね。教員となり、最後に校長として赴任したのが、白秋が卒業した矢留小学校でした。

——運命的ですね。大橋先生が感じる白秋の魅力はどのようなものでしょうか？

白秋の作品は確認されている限りでも、詩歌、童謡にも勤務し、そして教頭、校長となりました。その間に、県市の教育行政にも携わりました。

——教員生活のスタートが、聴覚障害児の学校だったのですか？

私は教育大学音楽科出身ですが、聴覚障害の子どもに出会うのは初めてでした。そこで出会った子どもたちの3年間が、私の教育の原点です。最初の一か月は満足のいく授業ができませんでした。そこで、小学部全員のリズム感覚を調査して、一人一人の聴こえ方は異なることや、音に対して健常児よりも感覚が研ぎ澄まされていることが分かったのです。そのときに「聴覚障害の子は耳が不自由」という考えが自分の中から消えました。

——どのような指導を行われたのですか？

1クラス7人、6年生の担任をしていましたが、授業では極力手話は使わず、口の形と発音で言葉を伝え、健常児と同じように授業をすることが定められていました。全学年の音楽専科の授業では、ピアノや打楽器などを活用しました。手で触れると音の振動を感じることができずから、和太鼓など全身で感じる楽器も用いましたね。

——子どもたちは音楽の授業を楽しんでいましたか？

多くの子どもたちは、体育や図工なども含めて、体を動かしたり、何かを体験する教科が好きですね。大学の後輩やボランティアのかたの協力でオーケストラの演奏を子どもたちに聴かせたこともありました。子どもたちが全身を耳にして聴く姿に思わず涙しました。

——学校でオーケストラを聴けて、子どもたちは楽しかったでしょうね。

学校には作曲家の芥川也寸志さんに来ていただいた

各1200、校歌や社歌が300以上あります。読んだ人がイマジネーションをどこまでも膨らませることができるといえる魅力で、だからこそ多くの作曲家の心を捉えて離さなかったのでしょう。中でも北原白秋と山田耕柝、二人のコンビは相乗効果が見事です。白秋は山田耕柝と出会う前は、自分の詩に付けられた曲の大半に不満でした。しかし、山田耕柝が作曲した『曼珠沙華』を聴いてから変わりました。

——北原白秋記念館では白秋の影をたくさん感じることができました。

柳川は白秋が生まれた地であり、白秋の原点となっている場所です。生家は当時酒造業を営み、長崎や五島方面から来た杜氏が唄う酒造り唄なども聴いて育ちました。原風景の空気を感じられるように、赤い酒

——長年子どもたちを見続けて、感じることはありますか？

時代は変わっていきますが、子どもの本質は変わらないと思います。いつの時代でも「発達」とは縫った糸玉をていねいにときほぐすこと、とも言われます。だとすると、「教育」とは周囲の大人が子どもの糸玉をときほぐしやすくしていくことなのではないでしょうか。けれども、今はその逆環境に向かっていくように

樽や酒蔵の錠前、オランダ時計など生家ゆかりのものもそろえています。

——近隣の町並みも美しいですし、すてきな場所ですね。

今では途絶えてしまいましたが、ここ白秋の生家では「潮」という純米酒を造っていました。白秋の生家を訪れた与謝野鉄幹らは「混合酒に舌鼓み打つ東京人に飲ませてやりたい」と記しています。その「潮」を市内の酒屋さんが17年前、復刻されていました。私はこの「潮」をここで販売できるよう奔走しました。白秋ゆかりのお酒を多くの方に飲んでいただきたいですね。この記念館は、柳川市の指導計画の中に位置付けられていますので、社会科の地域学習で子どもたちも訪れます。地域の人々によって大切に継続している「白秋音楽まつり」もあります。

原点は聴覚障害児

——先生は北原白秋記念館の館長になる前は、どのようなことをしていたのですか？

この記念館に来て6年が経ちましたが、その前は37年間、教育に携わりました。昭和51年から3年間、聴覚障害児の学校（ろう学校）に勤めました。その後、小学校3年間、教育大学附属小学校に5年間、ブラジルの日本人学校

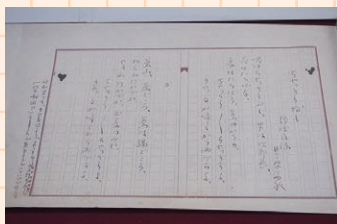


▲大橋先生と白秋の生地、柳川市。柳川城築城のおりに、城下町が形成されたと考えられている。この水路を川下りで巡ることができる

感じます。

——子どもたちに伝えたいことはありますか？

博物学者ファアブルの言葉を伝えたいですね。「この世に生まれたという運命は変えられないが運命を変える機会には誰にもある」という言葉です。その機会の第一はよき先生との出会い、第二はよき友との出会い、第三はあなたが選ぶ一冊の本だと。私はそれに音楽を加えたい。私は、校長時代子どもたちには「おもいやり」「かんがえる力」「ねばり」の「心のおかねを貯金しよう」と呼びかけていました。今は大人が貯金不足です。



▲『ちやっさり節』の原稿



▲白秋愛用の帽子。さまざまな白秋にまつわる展示物が並ぶ



▲白秋の生家。明治期の沖端大火で酒蔵棟焼失。残った生家は昭和44年に復元された



▲北原白秋記念館の入口

人と人をつなぐ 山里の「ブリュートナーピアノ」

長野県山ノ内町で

= 特別レポート =



左奥に見える青い三角の屋根が「ブリュートナーピアノ」が置かれているすががかわ体育館(旧北小学校体育館)

ドイツを代表するピアノメーカー、ブリュートナー社製のピアノが、長野県山ノ内町のすががかわ体育館(旧北小学校体育館)に置かれています。本来は大きなコンサートなどで弾かれるような非常に高価なピアノですが、さまざまな偶然を経て小学校にたどり着きました。地域のかたがたから「ブリュートナーピアノ」と親しまれ、長年大切にされているこのピアノの歴史をレポートします。

最高級のピアノを子どもたちの元へ

「高価なピアノ」という単語から皆さんが想像するのは、どのようなピアノでしょうか。

世界的に有名で、日本でも名の知れたピアノメーカーといえば「スタインウェイ&サンズ」「ベーゼンドルファー」「ベヒシュタイン」ですが、これらは大抵コンサートホールに置かれ、大切に管理されています。そのように価格も高く、プロによって演奏されるようなものを「高価なピアノ」として想像する人は多いことでしょう。

この3社と肩を並べる老舗ピアノメーカーが、ドイツのライブツィヒにあります。それが「ブリュートナー」です。今回ご紹介するのは、このブリュートナー社で製作された、ある1台のピアノのお話です。

時は明治時代に遡ります。1895(明治28)年、ドイツのブリュートナー社で1台のピアノが生まれました。124年前に職人の手で大切に作られたそのピアノは、東京のオランダ大使館によって購入され、船ではるばる日本へ渡り、大使館1階の玄関脇の部屋に置かれました。このピアノは大切に演奏され、大使館を訪れた日本人とオランダ人を音楽でつなぐ役目を担っていました。

しかし1923(大正12)年、関東大震災の大きな被害により、オランダ大使館も建て替えを余儀なくされました。建て替えにあたって、このピアノを設置し続けることが難しくなり、売却が決まります。ここでピアノが売られることを知った1人の校長先生が動きました。

今でこそ、学校にグランドピアノがあるのは当たり前ですが、当時はそうではありません。多くの人は「グランドピアノなど、見たことも、音を聴いたこともない」という時代です。そのよう

な中、長野県山ノ内町、当時の町立北小学校*の市川浄校長先生は、幼い頃にピアノを弾いた経験がありました。これからの教育には音楽が必要だと考えていた市川先生は、このオランダ大使館に置かれていたグランドピアノを、何とかして子どもたちに触れさせたいと熱望したのです。



ブリュートナーピアノ。通常のピアノが約350kgなのに対して470kgの重量がある。鉄が多く使われているため、内部のフレームがきれいに残っている

そこで市川先生は、学校のある山ノ内町須賀川の人々に、このピアノを購入する相談をもちかけました。

話を聞いた須賀川の住民は市川先生の考えに賛同し、「子どもたちにグランドピアノを買おう」と、それぞれができる限りの範囲で寄付をすることを決めました。小学生の子どもがいる家庭に限らず、須賀川に住むほぼ全ての世帯がお金を出し合ったことが記録に残っています。集まった額は623円45銭。当時200円で家が1軒建ったことを考えると、家3軒分の大金です。住民たちは見たこともないピアノに対して「子どもたちの教育のため」と、お金を惜しみませんでした。

*山ノ内町立北小学校は、1877(明治10)年、「温故知新」の文字から温知学校の名で開校した。2017年3月に閉校し、139年の歴史に幕を下ろした。同校の体育館は町立の「すががかわ体育館」として残り、現在も人々の交流の場になっている。

ブリュートナーピアノを囲む 山里の小さな音楽会

購入されたピアノは、東京から貨物列車に乗って長野にやってきました。そこからは荷車で押し引きしたりして、少しずつ運ばれました。北小学校は山の上であり、重くて大きなピアノを運び込むには大変な時間と手間がかかったのです。1924(大正13)年、運送屋や消防団など多くの人の協力のもと、ドイツ生まれのこのピアノは長野県の小さな町の小学校にたどり着きました。

それからすぐに「ピアノを見たい」「ピアノの音に合わせて歌いたい」と、遠方の学校からも、遠足の目的地としてたくさんの子もたちが集まりました。オランダと日本をつないだピアノが、今度は学校を超えて子どもたちをつないだのです。このピアノは「ブリュートナーピアノ」と呼ばれて地域の人々に親しまれ、誰でも触れるピアノとして大切にされてきました。

1987年、ブリュートナーピアノの製造から92年経った頃、新しいグランドピアノが須賀川区から北小学校に寄贈されました。この新しいピアノにこれまでの役目を譲り、ブリュートナーピアノは、そのまま学校に保管されました。



音楽会のために調律をする調律師の民部弘さん。民部さんは以前よりこのブリュートナーピアノの修復に携わっている。調律師の仕事について「最高峰のピアノはスタインウェイと言われますが、全てのピアノにその音を望んではいけません。調律するにはピアノに触れて、音を聴いて、そのピアノ自身が何を望んでいるのかを考えてあげることが大切です。そのためにできることを一つずつ丁寧に行うです」と語った



音楽会のフィナーレ。合唱団ドルチェ・ステッラと、水芭蕉の会とともに。指揮は唐沢史比古先生

その後20年間、ほとんど忘れ去られていたブリュートナーピアノでしたが、2007年に転機を迎えます。北小学校開校130周年のこの年に、ブリュートナーピアノを再び弾けるように修復する案が持ち上がったのです。須賀川区の人々はふたたび、このピアノのための寄付を惜しみませんでした。250万円を超える寄付のおかげで、ブリュートナーピアノは静岡県の工房で修復され、北小学校に戻ってきました。

同2007年、ブリュートナーピアノ修復を記念して、「第1回山里の小さな音楽会 in 須賀川」が、北小学校で開かれました。その後、この音楽会は毎年恒例となり、北小学校が閉校した現在も、同じ場所(すががかわ体育館/旧北小学校体育館)で続けられています。学年もピアノ経験も関係なく、ブリュートナーピアノを弾きたい子どもが誰でも参加できる音楽会です。2019年には第12回を迎え、ジャズ、合唱、子どもたちのピアノ演奏が披露されました。「ピアノを地域で大切にしていこう」「みんなで音楽を楽しもう」「地域の先人の心を忘れずにいよう」という目的のもと、地域の大人が一丸となり、ボランティアで音楽会の運営を続けています。

このブリュートナーピアノの柔らかく包み込むような音色と、人々の温かな思いが、これからも多くの子どもたちの心に届いてほしいと願うばかりです。

ブーケ編集部



第12回は、11人の子どもたちが演奏を披露した「ブリュートナーピアノ実行委員会」

080-6937-6157(松本) / ky-matsu@khaki.plala.or.jp

「山里の小さな音楽会」を支えるかたがたにお話を伺いました。

—音楽会がスタートして、12年もたつんですね。

竹田：長いような短いような……という気持ちです。当初お客様は200人もいませんでしたが、今では250人から300人ほど集まります。常連のかたも多く、毎年楽しみにしていただいています。

外山：このピアノは1923(大正12)年、北小学校の市川浄校長先生の提案により購入されました。それに賛同した地域のかたがたの熱意で寄付が集まり、購入に至りました。「ぜひ子どもたちに生の音楽を味わって学んでほしい」というこの地域の熱い思いが、現代につながっています。使われていない時期もありましたが、今から13年ほど前にも修復のため、寄付が集まりました。

竹田：修復されたのは、北小学校130周年記念のときでした。まずは須賀川区長を務めていた外山さんに中心になっていただいて。そのときの校長が、音楽に造詣の深い小山修二先生だったことも、修復が進んだ理由の一つです。

唐沢：修復前のピアノの状態は、どのような感じだったのですか？

外山：ボロボロの状態ですよ。音楽室の片隅に置いてはありましたけれど。

竹田：脚も傷んでいて、台の上に乗せていました。

外山：私も北小学校に通いましたが、実はブリュートナーピアノに上って遊んで校長先生に叱られたこともありましたが(笑)。当時は体育館の入り口にあって、ほとんど使われていませんでした。

—修復されたピアノの音はいかがでしたか？

唐沢：懐かしい音、とでも言うのでしょうか。今の流行りの音じゃなくて、ロマンチックな音だと感じます。

千野：ロマンチックな音というのは私も同じ印象です。

唐沢：この体育館にも合っていると思いますよ。とても響きますよね。私がブリュートナーピアノに出会ったのは、2016年、北小学校閉校の1年前でした。

千野：唐沢先生には閉校記念式典で、須賀川の民話をもとに作曲していただいた音楽劇『おはん』を合唱団のchor doと演奏していただきました。

唐沢：この地域の皆さんはとても温かいです。そのあと、別の場所で演奏会を開いたとき、この音楽会のお客様が聴きに来てくれたんです。そのときも、人と人をつないでくれるピアノだな、と思いました。

竹田：2010(平成22)年、ブリュートナーピアノを使用した音楽会を行うことをオランダ大使館に手紙で知らせたところ、なんと大使が来校したこともあります。

千野：私が北小学校の校長を務めた2年目と3年目は、子どもたちの修学旅行で大使館に行くことができました。大使館のかたがたもこのブリュートナーピアノの話詳しくご存知で、今でも大切にされていることをうれしく思っていました。

竹田：ほんとうに人と人をつなぐピアノです。

—製作者も自分の作ったピアノが、まさか山ノ内町で弾き継がれるとは想像もしないでしょうね。

唐沢：ええ、今天国で驚いていると思いますよ。「どうして日本の、この山里の体育館で、みんなに囲まれているんだろう」って。作った人も、このピアノを送り出した人たちも、きっと皆ニコニコしていることでしょう。

竹田：ピアノが残ったのは、行政的な理由もあります。一般的に学校にあるものは教育委員会の所有です。しかし1987年、開校110周年を記念して須賀川区から新しいグランドピアノが寄贈されたことにより、ブリュートナーピアノは学校の管理から外れて「廃棄」という形になりましたが、小学校の資料室に保管されました。開校130周年を記念して区民の寄付で大修理をした2007年からは、須賀川区とブリュートナーピアノ実行委員会が大切にピアノを管理しています。

外山：この場所では、すばらしい先生がたに子どもたちの指導をしていただく機会も多くありました。小澤征爾さんが成城学園の児童とオーケストラ、沼尻竜典先生を連れて訪れ、北小学校の児童と交流をしてくださったこともあります。地域の人々にとって、とてもうれしいことだなと思います。

千野：この音楽会では、誰でも出演できることを大切にしています。できるだけ多くの子どもたちにピアノを弾いてほしい。それは、このピアノの購入に動いた市川先生の「子どもたちに音楽教育を」という理念が生き続けている証拠です。コンクールなどで切磋琢磨する世界とは違い、この音楽会の意義は音楽の裾野を広げることです。この山ノ内町須賀川で、音楽の広がりを支えるブリュートナーピアノが大切にされ、先人の意思を受け継ぐ営みが続けられていることを、多くのかたがたに伝えたいのです。

唐沢：この地域のかたがたは地元を盛り上げようとさまざまな面ががんばっています。この須賀川は、まるで天空のようで、高原地帯の別天地のごとく、異文化が持続されているように感じます。皆さんで子どもを生かそう、生かそうって思っているのですよね。

千野：はい。この音楽会を訪れる大人たちは皆「がんばれ！」っていう気持ちで見守っています。

唐沢：まさに、このピアノの音色のように温かい音楽会ですね。



右下写真：左から、外山俊さん(すがかわ暮らし応援隊/元須賀川区長)、竹田時治さん(ブリュートナーピアノ実行委員会会長)、千野和江先生(山ノ内町立北小学校元校長)、唐沢史比古先生(作曲家・指揮者)

上野耕平の
crossing [クロッシング]

第5回
上海磁浮列車 / Shanghai Maglev Train
(上海リニアモーターカー)



先日初めて中国、上海へ行った。上海浦東国際空港から市街地までは、せっかくなのでリニアに乗った。あつという間に300、400km/h。オーストリア加速しつゝ。あつという間に目的地。あつという間に。ただ、残念ながら乗り心地や座席は洗練されていない。あと8年ほどで日本でもリニア新幹線が走り始める。東京から名古屋まで40分。信じられない速さだ！時間だけ見ると通勤圏内。JR東海が威信をかけて開発を進めてきたリニア中央新幹線。500km/hで走るその車窓、旅情はどんなものなのか……。上海で日本の未来に希望を膨らませた。

文・写真：上野耕平(うへの・こうへい)

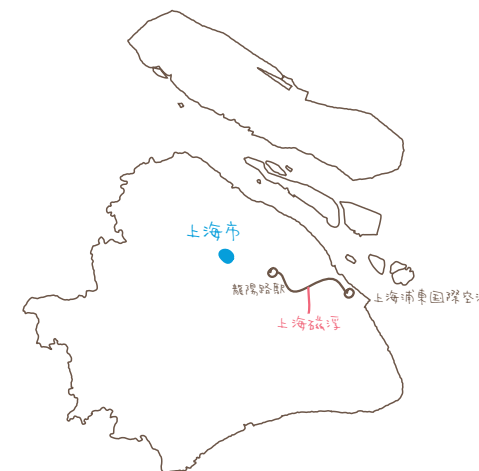
第28回日本管打楽器コンクール サクソフォーン部門において、史上最年少で第1位ならびに特別大賞を受賞。学生時代にCDデビューを果たす。2014年第6回アドルフ・サククス国際コンクールにおいて、第2位を受賞。常に新たなプログラムにも挑戦し、サクソフォーンの可能性を最大限に伝えている。現在、演奏活動のみならず「題名のない音楽会」、「報道ステーション」等のメディアにも多く出演している。第28回出光音楽賞受賞。昭和音楽大学の非常勤講師。The Rev Saxophone Quartet、ぼんだウインドオーケストラコンサートマスター。

Information

上野耕平がソリストを務める吉松隆作曲『サイバーバード協奏曲』を収録したCD『BEYOND THE STANDARD vol.3』(日本コロムビア) [3,000円+税/COCQ-85466] が好評発売中。
〈演奏〉アンドレア・パッティストーニ(指揮)、東京フィルハーモニー交響楽団、上野耕平(Sax.)、山中惇史(Pf.)、石若駿(Perc.)
〈収録曲〉ベートーヴェン『交響曲第5番(運命)』、吉松隆『サイバーバード協奏曲』

編集部メモ

上海浦東国際空港から上海市内方面に行くための移動手段の一つが、空港と龍陽路駅の約30km間を結ぶリニアモーターカーである。現地では「リニアモーターカー」ではなく、中国語「磁浮」、英語「Maglev」と呼ばれており、空港内の案内表示もそうなっている。乗車する前に手荷物検査があり、運行時間によって最高時速は変化する(所要時間は最高時速で約8分)。市街地に行くためには、龍陽路駅に到着後、地下鉄への乗り換えが必要。



One day, ワンデー ワンモーメント one moment

フォトエッセイ

写真・文：ヒダキトモコ
Photo・Text：Tomoko Hidaki

ヒダキトモコ

写真家。日本写真家協会・日本舞台写真家協会会員。
東京都出身、米国で幼少期を過ごす。慶應義塾大学法学部卒業。会社員を
経て写真家に転身。音楽誌・経済誌等の表紙・グラビア、各種舞台・音楽
祭のオフィシャルカメラマン。ステージ写真、ジャケット写真、写真集等。
官公庁や企業の撮影も多数。撮影スタンスは自然体、人の内面的な魅力や
イキイキとした写真表現を大切にしている。
<http://hidaki.weebly.com>

7 枚目

助手席の相棒

この子は竜馬。坂本龍馬が好きでつけた名前だが、賢く優しい子に育った。うちは従来犬派だったが、写真家の仕事をしながら一緒に暮らせる動物として初めて猫と暮らした。仕事場のパソコン前に椅子が2つ並んでいるのだが、そこが竜馬と私の定位置である。

撮影や納品が立て込み、目を血走らせて作業する私の耳に、プスプスーと聞こえてくる寝息の優しさ。またある時は、夜中も続く作業を見かねたように

肉球が伸びてきて私の腿を押し、「そろそろ営業終了してお風呂入ったら？」と言ってくる。逆に納品完了前に食後のテレビに見入っていると、「そろそろ仕事に戻りなよ」と言う。

親馬鹿かもしれない。でも14年も一緒に暮らすと、言葉もそれ以外のことも、ちゃんと伝わるのである。





[ワールドレポート]

World Report

南アフリカの大地を走る移動図書館車

“図書館で会いましょう”プロジェクト

南アフリカはアフリカ大陸の南端に位置し、多くの野生動物が生息する自然豊かな国です。ラグビーの強豪国としても有名で、2015年や2019年のワールドカップで日本が対戦したことも話題となりました。一方、貧富の差が人々の生活や治安に影響を及ぼしており、特に教育水準の向上が課題となっています。学力の問題を解決するには、読書が一つの手だてだといわれていますが、図書室が設置されている学校は国全体で3割足らず。本に触れる機会が限られているのが現状です。

「こうした図書室のない学校に移動図書館車を届けたい。そして、本が読みたいくなるような歌を贈りたい」——そのような願いで始まったのが“図書館で会いましょう”プロジェクトです。

2019年9月、作曲家の弓削田健介さんと教育芸術社の編集部員による南アフリカ訪問が実現しました。このレポートでは、現地で活躍する移動図書館車の姿や子どもたちに歌を届ける様子をお伝えします。



弓削田健介 (ゆげた・けんすけ)

福岡県出身の作曲家、シンガーソングライター。主に小・中学校で歌われる合唱曲を作曲し、全国を旅しながら年間150~200回の演奏活動(スクールコンサートや講演会)を行う。作品集『図書館で会いましょう』を中心としたプロジェクトにより、教育芸術社とともに南アフリカへ移動図書館車を寄贈。

“図書館で会いましょう”プロジェクト for South Africa

読書の楽しさを伝えたいという弓削田さんの思いで作られた、図書館や本をテーマにした歌の数々。学校の朝の会や読書活動の導入で歌われたり、読み聞かせのBGMとして使われたりしています。それらの歌を1冊にまとめたのが作品集『図書館で会いましょう』です。

この作品集から生まれた“図書館で会いましょう”プロジェクトは、南アフリカの子どもたちに「移動図書館車」と「歌」を届けるという2本の柱で構成されています。2017年にスタートして以来、作品集の収益による図書館車の寄贈が実現、そして作品集のテーマソングである『図書館で会いましょう』の英語版を制作するなどの活動を行ってきました。

2017年11月に寄贈した図書館車は、神戸市立図書館より譲り受けた緑色のバス。長い船旅を経て南アフリカに到着した図書館車は今、どこで、どんなふうに活躍しているのでしょうか？



弓削田健介作品集『図書館で会いましょう』(教育芸術社)



作品集をもとにしたミュージカルやコンサートも行われた



南アフリカ大使館で行われた移動図書館車の出港式(2017年11月)

移動図書館車は今、どこに？

日本から出発した移動図書館車は、南アフリカ東部、ムプマランガ州に到着していました。ムプマランガ(Mpumalanga)とは現地言葉で「太陽が昇る場所」という意味。野生動物を間近で見られる南アフリカ最大の国立公園を有し、ダイナミックな峡谷が広がっています。シトラスやサトウキビの畑が続く道をひたすら走り、図書館車が停まっているムブジニ小学校(Mbuzini Primary School)へ。



そこには生まれ変わった図書館車の姿がありました。アフリカらしいカラフルなペイントが施され、赤土の大地に何ともマッチした車体。しっかりとメンテナンスされ、舗装されていない砂利道でも安心して走ることができそうです。感慨深く眺めていると、子どもたちが歌を歌いながら列をなして図書館車のほうへやってきました。朗々としたコール・アンド・レスポンスを響かせながら、くっつくのない笑顔で近づいてくる子どもたち。「シスワティ(SiSwati)」という現地語の歌で、「日本の皆さんが図書館車を届けてくれたおかげで、本が読めるようになりました。ありがとう」という内容だそうです。



カラフルなペイントで生まれ変わった移動図書館車(2019年9月)

子どもたちは順番に並んで図書館車の中に入り、お目当ての本を探し始めます。絵本や小説、歴史や科学の本など、子どもたちの興味はさまざま。借りたい本が決まったら先生に伝えて、貸出リストに本のタイトルと自分の名前、返却日を記入します。「この図書館車はいくつもの学校を回るので、約束どおりに返却しないと次の学校の子どもが困ってしまいます。だから返却日はきちんと守るように指導しています」と貸出係のマシャバ先生。

先生はさらに続けてこうおっしゃいました。「本は英語力を付けるだけでなく、子どもたちが自身の可能性を広げ、夢を見つけるためのツールなんです。この小さな村に住んでいても、本があれば世界中のことを知ることができますから。」図書館車は本だけでなく、子どもたちの未来をも運んでいるのだと確信した瞬間でした。



6年生の女子。環境に関する本に興味があるという



真剣に本を探す子どもたち



貸出リストの説明をするマシャバ先生



Interview クイーン・マシゴさん(ムプマランガ州教育庁 教育支援グループ代表)

私はムプマランガ州における図書館の運営やコンピュータ教育を取りまとめています。2年前にムプマランガ州を走っていた移動図書館車が事故で故障してしまい困っていたところ、日本から新たな図書館車が届き、とても感激しました。日本と南アフリカがよいパートナーシップを築き、教育の分野において協力し合えることを願っています。

格差社会が抱える課題



ムブジニ小学校 (Mbusuzini Primary School)

南アフリカの中でも、観光客が訪れるケープタウン、ビジネス街として発展したヨハネスブルグなど、都市部の一部に限ると貧しさはそれほど感じられないかもしれません。しかし、そうしたエリアを離れると、全く違う光景が広がります。バラックが立ち並ぶ居住区や、地元の人でさえ足を踏み入れるのをためらうほど毎日のように犯罪が起こっている地区も少なくありません。

この格差の要因としては、1994年まで続いたアパルトヘイト（人種隔離政策）が挙げられます。これは今もなお人々の生活や治安に影響を及ぼしており、黒人の失業率が約30パーセントと、非常に高いことにも表れています。また、教育においては、アパルトヘイトの時代に十分な教育を受けられなかった人も多く、教員の養成や教育水準の向上が課題となっています。

南アフリカの学校事情

南アフリカの義務教育は初等教育7年、中等教育2年の計9年間です。小学校3年生までは母語*を併用しながら授業が行われるのに対し、4年生以上は全教科を英語で学ぶカリキュラムであることから、英語力の不足が学力の低下につながるという連鎖があります。英語の読解力を付けるためにも読書活動が必要であると言われてはいますが、図書室が設置されている学校は国全体で3割にも満たないのが現状です。



教室での授業風景



給食の例。いも類、ほうれん草のあえもの、豆料理など

私たちが訪問したムブジニ小学校は、先生が16名、児童数が約500名の中規模の学校でした。モザンビーク国境付近に位置しており、移民の子も多く在学しているそうです。子どもたちは国から支給された制服を着ているので、一見貧しいようには見えませんが、先生によると、家庭で十分な食事がとれず、給食を食べることが目的で学校に通っている子も少なくないそうです。

そのような事情を抱えながらも、実際に接した子どもたちはびっくりするほど人なつこく、目が合うと満面の笑みを返してくれます。教室をのぞくと、プリントの問題を一生懸命に解いたり、おしゃべりをして先生に注意されていたりと、日本と変わらない光景を見ることができました。



この地域に伝わる“Bees (蜂)”と呼ばれる民族舞踊

Let's sing and dance! — 音楽の力



今回の旅のもう一つの目的は、子どもたちに歌を届けることです。弓削田さん作詞・作曲のテーマソング『図書館で会いましょう』の英語版をムブジニ小学校の子どもたちに伝えるという試みでした。

英語版のタイトルは“World of Fairy Tales”。「図書館で会いましょう」という歌詞をそのまま翻訳すると「See you in the library」になりますが、南アフリカには図書館が少なく、実際に行ったことのない子どもたちもいることから、「See you in the world of fairy tales(おとぎ話の世界で会いましょう)」と訳すことにしました。本を通していろいろな世界を旅することができる、そして自由に夢を見られるというメッセージが込められた歌です。

歌詞カードを手にした子どもたちは、弓削田さんの歌うフレーズをまねてリピート。何度か繰り返すと、皆、歌詞カードを床に置いてしまい、体でリズムを取りながら歌い始めます。こんなに早く歌詞を覚えてしまうなんて！と驚いていると、近くにいた先生がその理由を教えてくださいました。彼らはもともと文字をもたず口頭伝承で物事を伝えてきた民族。だから繰り返し唱えながら覚えてしまう文化なのだ、と。

ダンスの得意な子が先導して踊り出すと、周りもステップを踏み始めました。音楽を体いっぱい受け止めて、歌とダンスを表現する感性は特筆すべきものです。いつの間にか先生たちまで輪に加わり、会場は熱気に包まれました。音楽が心の壁を取り払い、心地よい一体感を与えてくれることを実感したひととき。「またいつか一緒に歌おう」と言ってくれる子どもたちに手を振りながら学校を後にしました。この歌とともに、本の世界にたくさん触れてほしいという願いを抱きながら。



“World of Fairy Tales”を歌う弓削田さんとムブジニ小学校の子どもたち



Interview ダンスをリードしてくれた4年生のマウラレラさん

私はダンスが大好きで、いつもお母さんと一緒に踊っています。“World of Fairy Tales”は踊りやすいリズムの歌で、とても楽しかったです。本を読むのも好きなので、歌詞も気に入りました。



南アフリカ訪問の様子を動画でご覧いただけます。現地の子どもの歌やダンスをぜひお楽しみください。

https://www.kyogei.co.jp/library_project/



弓削田健介さんと教育芸術社による“図書館で会いましょう”プロジェクトは、今後もさまざまな展開を考えており、読書活動の推進や読書コンサートなどを実施していく予定です。どうぞご期待ください。

このプロジェクトは、NPO法人SAPESI（南アフリカ初等教育支援の会）との連携事業です。次号のワールドレポートでは、SAPESI ファウンダー、はるな 運たけし 志さんをご紹介します。



(取材・構成：ブーケ編集部)

*南アフリカでは、英語、アフリカーンス語、ズールー語、コーサ語、ソト語など11の言語が使われている。

- 02 [連載] 教育百景 おしえ・そだてる日々 第2回 大橋鉄雄
- 04 [特別レポート] 人と人をつなぐ山里の「ブリュートナーピアノ」長野県山ノ内町で
- 07 [連載] crossing 第5回 上野耕平
- 08 [連載] フォトエッセイ One day, one moment 7枚目 ヒダキトモコ
- 10 [連載] 日本めぐり 第5回 京都市 叶^{かのひろ}紘(舞妓さん)
- 12 [連載] World Report vol.6 南アフリカの大地を走る移動図書館車



<https://www.kyogei.co.jp/>

編集後記

『bouquet [ブーケ]』No.7をご清覧いただき、ありがとうございます。

今号の不定期連載「教育百景 おしえ・そだてる日々」の舞台は、福岡県柳川市の北原白秋記念館。

城下町として古い歴史をもつ、北原白秋の過ごしたその場所で、館長の大橋鉄雄先生が語られた教育現場でのご経験やお考えは、優しく背中を押してもらおうような、温かいものでした。「日本めぐり」に登場するのは、舞妓・叶^{かのひろ}紘さん。舞妓として生きていくことを決めたきっかけや普段の過ごし方など、さまざまなお話を伺いました。

お忙しい中、取材や執筆、編集にご協力賜りました全てのかたに、心より厚く御礼申し上げます。

staff

Art Direction & Design (表紙・本文) : 松田剛、中澤美羽 (quia)

写真 : 歌川藤平蔵(日本めぐり)、保利一誠(World Report) / DTP : 清新社 / 印刷 : 新日本印刷 / 製本 : ヤマナカ製本